『もう一年そのままに』（ルカの福音書 13 章1-9 節）2022.3.27.

＜はじめに＞ 春はいのちの芽吹きの季節です。また新年度の始まりでもあります。また春が巡って来たからと言って、全く同じことの繰り返しではありません。私たちは確実に時の流れを進んでいます。

Ⅰ　災難に思うこと(1-5)

①身近な出来事(1，4)

イエス一行はガリラヤからエルサレムに向かう旅の途上です。駐パレスチナ総督ピラトがいけにえにガリラヤ人の血を混ぜる蛮行も、シロアムの塔が倒れて 18 人が犠牲になった事故も、痛ましい出来事でした。なぜそんな災難が彼らの身に及んだのでしょうか。

②出来事とその人との関係(2，4)

悲惨・理不尽な出来事に遭った人を「罪なき人」と呼ぶことがあります。どうしてこのように言うのでしょうか。ここでは災難にあった人を「罪深い人」「負いめのある人」と結び付ける見方があります。この考え方をすべての出来事に当てはめることはできるでしょうか。

③そんなことはありません(3=5)

イエスは因果応報とは別の見解を示します。地上で災難に遭遇するか否かにかかわらず、私たちすべてに滅びは待ち受けています。私たちはみな罪を抱えているからです。同時にイエスは一筋の希望も示します。自分の罪を悔い改めるなら、滅びから免れます。

Ⅱ　実の無いいちじく(6-9)

①いちじくの木(6)

いちじくはパレスチナでよく見かけられます。芽生えたいちじくの苗木は、大した世話も必要なく、大方 3 年で実を結ぶまでになります。主人がぶどう園にわざわざいちじくを植えたのは、何のためだと思いますか。主人といちじくは、それぞれ何を例えているでしょう。

②切り倒してしまいなさい(7)

期待外れのいちじくに業を煮やした主人は、園の番人に切り倒すよう命じます。この主人は、なぜこんな命令をしたのでしょうか。それは理不尽な要求・命令でしょうか。因果応報で判断すると、どうなるでしょう。

③番人のことば(8-9)

番人は 1 年の猶予を願います。その間、施肥などの世話もしてみると約束します。彼はなぜこのような提案を主人にしたのでしょう。1 年後、このいちじくはどうなったと思いますか。このたとえで、イエスは一体何を伝えようとしているのでしょう。

Ⅲ　いのちがあるなら

①人生は不公平か

人生に起こり来る出来事すべてを、因果応報で片付けられるわけではありません。原因理由のわからない不遇も多々あります。神様は不公平なのでしょうか。確かに人生の道筋は人それぞれです。しかし、神様は一人ひとりに一度の人生、いのちを与えておられます。

②いのちへの期待

生けるものには、それぞれ独特の生命の表れがあります。いのちは成長、増殖します。維持法則から外れたり、寿命を迎えると死にます。神様は私たちにいのちを与えたのは、期待があるからです。どんなことを神様は私たちに期待しているでしょう。

③生かされている間に

実の収穫は主人の喜びです。私たちは神に喜ばれる何かを生み出しているでしょうか。神様は、私たちのいのちの発露を見出すために今も働いておられます(エペソ 2:1-10)。生きているうちに、罪を悔い改め、キリストとともに生かされることを切望されています。

＜おわりに＞ 私たちは今生きています。それは神様の恵みで、実を結ぶためです。私たちに与えられた時には限りがあります。その間に神様の前に喜ばれるものとならせていただきましょう。それは、まず神様と顔と顔を合わせることです。(H.M.)